

地域情報（県別）

【石川】「加賀だからできると思われたい」市の治療水準目指す-池田智行・加賀いけだ皮膚科院長に聞く◆Vol.3

県外からも患者が来院、1日100人を超える日も

2025年9月10日（水）配信 m3.com地域版

「加賀ではできない」から「加賀だからこそできる」へ——。2025年5月に開院した加賀いけだ皮膚科の池田智行氏は、「当院の治療を加賀市の水準にしたい」と意気込む。開院して2カ月余りだが、県外からも患者が訪れており、多い日の患者数は1日100人を超える。人口減社会を踏まえ、「加賀にもっと人を呼びたい」と話す池田氏。重視している患者満足度とスタッフの働きやすさの両立など、開業医として心がけていることを聞いた。（2025年7月16日オンラインインタビュー、計3回連載の3回目）

▼第1回は[こちら](#)

▼第2回は[こちら](#)



池田智行氏（本人提供）

——加賀いけだ皮膚科は、2025年5月1日に開院しました。現在の患者数と人的体制をお聞かせください。

1日の患者数は80～90人ほどで、多い日は100人を超えます。加賀市全域のほか、あざや酒さ（赤ら顔）、にきび、そばかす、シミのレーザー治療などを目的に市外や福井県など県外からの来院もあります。過去に勤務した病院では高齢の患者さんが多かったですが、SNSでの情報発信やペーパーレス・アプリでの予約を採用していることもあり、開院当初は20、30代の患者さんやそのお子さん（未就学児や小学生）が目立ちました。口コミで直接来院も可能であることを知っていただけたためか、現在は患者層が広がってきており、90代の患者さんもいれば生後2、3カ月の子もいるといった状況です。

人的体制は医師1人、事務長1人、常勤看護師3人、常勤事務3人の計8人です。院内には診察室が2つ、処置室が1つ、レーザー治療室が3つあり、処置室も診察室代わりにして私が各部屋を移動しながら診療しています。

「本当に困っていたのでありがとう」患者の声に感動

——開院間もない地方のクリニックで、医師以外の常勤スタッフが7人いるのは多いように思います。

最初から多めに雇用しているのは、複数の理由があります。まず、地方は人材難でスタッフが集まりづらいと聞いていたので、出だしが肝心、つまり、良い人にオープニングスタッフとして入職してもらいたい思いがありました。加えて、当院はスタッフの働きやすさを重視しているため、「週休2日で残業なし」を堅持したい考えもあります。さらに言えば、当院の将来性も挙げられます。隣の小松市の皮膚科クリニックには安定して1日100人以上が来院するところもあると聞くので、当院の患者さんが増えたときに対応しやすくしておきたいなど。当院の敷地は430坪（約1422平方メートル）の広さがあり、増設もしやすいようにしてあります。

——加賀市には数十年前から皮膚科のクリニックが1軒しかなかったといいます。地域の反響はいかがですか。

内覧会の来場数や患者数に反映されているところもあると思いますが、直接ないし間接的に、「本当に困っていたのでありがとうございます」と言われるのはとてもうれしいですね。お困りだろうと思ってはいたのですが、「今までは皮膚科に30分かけて行っていたけれど、これで便利になります」といった声を直接聞けるとは思っていなかったので、驚いています。地域ニーズに対する自分の想像が可視化された印象です。

医療クラークが代行入力し、医師は診察に集中

——先生は「患者の満足度とスタッフの働きやすさを両立させたい」と言います。患者の満足度向上についてはどんな取り組みを通し、実現させたいですか。

レーザー治療をはじめとした先端的な皮膚科医療の提供や、ネット予約など各種システムを活用した受診効率の向上、医療クラーク制による患者さんの不安軽減などを通し、実現を図っていく考えです。開業医として1日に70人以上の患者さんを診る際、1人で全て電子カルテに入力するのは容易ではありませんし、また、パソコンに目を落とす時間が長くなると、患者さんの満足度が減るばかりか、患者さんにとって診察時間が「不安が助長する時間」になりかねません。実際、私が勤務医をしていた時に患者として受診した妻から「ずっとカルテを見てたよ」と指摘されたことがあり、開業したらスタッフに医療クラークとして代行入力をお願いし、私は診察に集中し、患者さんと目を合わせながら対話をしたい思いがありました。

薬の塗り方について、丁寧な説明を心がけている点も工夫の一つです。湿疹やアトピーが改善していかない理由に医療機関の説明不足や患者さんの理解不足があり、薬を変えなくても塗る量とその方法が適切であれば効果が高まる場合があります。にきびの薬物療法もここ10年で進歩しており、幅広く効果が見込めて肌に優しいベピオローションは刺激がなければ顔全体に塗るのが推奨される一方、従来の薬のイメージから一部にしか塗っていない方が散見されます。診療の際は必要に応じて、私が自ら薬を塗りながら説明しています。

乳幼児のあざは早期治療が重要、首が座っていれば可能

——スタッフの働きやすさ向上についてはいかがでしょう。

残業ゼロを継続していくため、各種機器とシステムを利用して業務効率の向上を図っています。先にも挙げたように診察券をなくしてアプリで予約を取れるようにし、スピーカーや内線機能を搭載したビジネスフォンを導入してスタッフの移動の手間を減らしました。メンタルケアとしては面談を毎月行い、不満をためないよう努めています。

「スタッフが気持ちよく働ける、やりがいのある職場づくり」の大切さを実感できるのは、開業医ならではの思いです。職場が働きやすいと心にゆとりができ、それが患者さんへの接遇やケアにもポジティブに影響するのではないのでしょうか。当院に入職したことを後悔させたくないで、「転職してすごく良かった」と言ってもらえたり、過去の同僚づたいに「『池田さんのところに行って良かった、とても楽しい』と言っていましたよ」と聞けたりするのはすごくうれしいです。

——最後に、目指すクリニック像をお聞かせください。

「加賀ではできないよ」から「加賀でもできる、加賀だからこそできる」といったように、地域の皮膚科医療に対するイメージを変えたいです。過去に加賀市に勤務した時、先に挙げたようなことを言われる方が実際にいて、皮膚科医として残念な思いをしました。常に先端的な医療を吸収しながら、当院を加賀市の治療水準にできるよう尽力し

たいです。加賀市も地方の傾向と同様に人口減少が続いており、これからさらに人が減っていくと思われるので、地域を衰退させないためにも市外から人を呼びたい。スタッフの働きやすさを重視しているのも、人口減社会が背景の一つにあります。

開業医としては、地域連携やあざ治療の啓もうも推進していきたいと考えています。乳幼児へのあざの治療は、早期に行うことでより効果が見込めます。体表面積が小さく皮膚も薄いため、低年齢の方が効果的なんです。例えば、手の甲にできた青あざは数カ月で大きくなってしまいますし、2歳以上になるとレーザー照射の痛みがトラウマになってしまう可能性もあります。乳幼児の場合、首が座っていればレーザーを照射できるので、困っている小児科や皮膚科の先生がいらっしゃれば、ご相談いただけるとうれしく思います。

◆池田 智行（いけだ・ともゆき）氏

2014年金沢医科大学医学部卒。金沢大学皮膚科に入局し、同大や石川県立中央病院、富山県立中央病院に勤務、加賀市医療センター皮膚科では医長を務める。2025年「加賀いけだ皮膚科」を開院。日本皮膚科学会皮膚科専門医、日本抗加齢医学会専門医、日本性感染症学会認定医。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

